

比較文体論紹介にあたって

(続)

——日本の外国語——

円 尾 健

問題の提起

先号の『比較文体論紹介にあたって——日本のヨーロッパ研究——』に続いて、今度は「日本の外国語」を取り上げることにする。

ちょうどさきの論文を書いたあと、ジャーナリズムではいわゆる「日本語ブーム」が起り、おそらくはその副産物として、一部では英語の学習・研究も論争の対象となっている。これは、多分日本の国際的地位の変化、そしてそれともなう外国観のそれを如実に反映するものと考えられるが、外国語関係者の一人として、願わくはその論争が一時のブームに終らず、また「臭いものにフタ」式にウヤムヤのうちに立ち消えになったりせずに、徹底的な検討によって深められるよう望みたい。

さて、ジャーナリズムの動きはともあれ、筆者の課題は先号にも述べたように、比較文体論が、実は比較文化論に他ならないという事実に着ち、「日本人のヨーロッパに対するアプローチを根本的に検討する」ということであった。その中で外国語にも若干の考察を加えたが、これはその程度ではすまされない、ヨーロッパ研究のもっとも基本的で具体的な問題として、あらためて独立して論ずる必要があると思ったのである。

昨年は、「蘭学事始」で有名な『解体新書』の反訳の二百年目という、記念すべき年であった。筆者は、わが国における近代的な科学、そしてヨーロッパ研究の黎明を告げるこの大事業を描いた小説『冬の鷹』（吉村昭）を読み、前野良沢、杉田玄白などの先駆者たちの言語に絶する苦勞と努力

を今さらのように知って感動すると同時に、その後の日本史の展開に思いを馳せずにはいられなかった。これら先駆者の超人的な努力を知ってか知らずか、カタカナの横文字や反訳書が巷にあふれ、「石を投げれば英文科にあたる」ほどの外国文化の氾濫する——そして自分もその一翼をかついでおこぼれを頂戴している——現代日本の姿がそこにオーバーラップして映るのを避けることができなかったのである。

けだし、英語をはじめとするヨーロッパ諸語は、明治以来、日本人にとってそれをやるのがすでに善とされた、いわば“文明開花”のシンボルであった。敗戦後は、教育の大衆化とともにさらにそれに拍車がかかり、教育問題、ことに大学入試が社会問題としての規模をもって全国民を巻きこんでいる現在、数学とともに受験科目の二大横綱として、国民の途もないエネルギーを呑み込んでいることは周知のとおりである。筆者の大学受験のころ、国語より英語の配点の高い大学があり、英語に強かった(?) 筆者などは、そこは何も知らない子供のことで、これで点がかせげると無邪気によろこんだりしたことをおぼえているが、それ以後二十年もたった現在、そのような植民地的な英語重視はすでに過去の遺物になったものとばかり思っていたところ、たまたま事情がまったく変わっていないことを知って、日本人の、奇怪といつていいほどの異常な英語熱にただただ呆れ返ったのであった。(ちなみに、本学でも工学部に英語の試験はあっても国語の試験はない。)

戦後の“文化国家”の理想への努力が外国語習得にも見られるというのであれば、共に慶賀こそすれ、遺憾に思う理由はまったくないはずであるが、しかし、もしそのように巨大なエネルギーを費して教え、学んだ外国語が、実はあまり役に立たぬシロモノであり、大部分エネルギーの浪費以外の何物でもないというのであれば、これはいったいどういうことになるのであろうか。そしてその危惧を証拠立てる事実はいくつもないのである。

最近注目を浴びた、言語学者の手になる『閉ざされた言語・日本語の世界』(鈴木孝夫)は、「わが国が言語的にはまだ鎖国時代を脱していない」

ことを豊富な例をあげて論証しているが、それを裏づけるかのように、たとえば昨年の毎日新聞の学芸欄（昭和49年11月16日）で、前ILO常設諮問委員会労働側代表という人が、『日本人の外国語——まだまだ世界に通用しない——』といういささかショッキングな（ことにわれわれ外国語教師にとっては）題で国際会議での経験を語っている。欧米に関する情報が、「下痢症状を起す」ほど日本の社会にはらんし、日本人は欧米についても何か知っているように思っているが、「この認識が、実は錯覚と幻想にもとづいていることに気づいたとき、私はいい知れぬ焦燥感と恐怖感に襲われた」として、この筆者は「日本人の外国語は国際的に通用しない。日本はまだ鎖国状態——ここでも期せずして鎖国ということばが使われている・筆者註——を続けている」とその印象を述べ、ペリー来航以来、百年以上の歳月がたったが、日本人の英語の力は当時と大して進歩していないのではないかと問うている。

また、最近「大宅壮一賞」を受けたノン・フィクション『なんで英語やるの』（中津遼子）には、英語をめぐる日本人の奇怪な意識と行動が描かれていて、外国語関係者の一人として、筆者は読んでいてただ溜息が出るだけであった。すでに百年もの実績を持つはずの日本の英語および英語教育が、事実、客観的に見て、いかに異様なものであるかは、これも最近、あるイギリス人のジャーナリストが、かれの目に映った日本人の英語について新聞紙上に発表した文章¹⁾を一読しただけで明かであろう。

“文明開化”あるいは戦後は“文化国家”という美名のもとに発生した、一億あげての「英語狂い」または「横文字狂い」は、結局はただの空騒ぎにすぎなかったのであろうか。外国語というわけの分らぬ怪物に国中が振り廻され、自国語もはったらかして、尨大なエネルギーと時間を浪費して残った事実が、「英語教育は日本においてビッグ・ビジネスである」(同志社大、オーティス・ケリー教授)のだとすれば、もう何をかいわんや、である。

1) デービッド・サーブ『発言』。「毎日新聞」昭和50年6月30日朝刊掲載。

“文化国家のシンボル”であったという点では、英語は別のシンボル、大学やピアノを連想させはしないだろうか。現在の大学の実情は述べるまでもないとして、最近世間を騒がせたピアノ殺人事件ほど戦後日本文化の底の浅さを露呈した事件もないだろう。（日本人がだれ一人——老若男女、庶民非庶民、また左翼右翼を問わず——文化の象徴として疑わなかったピアノが、実は少くとも日本では、“騒音”をまきちらすおよそ非文化的なシロモノであり、ゴミや糞尿とまったくくらぶところのない公害の元兇であったとは、ああ！）“英語殺人事件”といったものが起きないのは、ただピアノほど“騒音”を出さないからではないかとさえ思われる。

いずれにしろ、以上のような事実はひとり英語にかぎらず、程度の差こそあれ、他の外国語にも共通することである。

それにしても、“通用しない外国語”とはいったい何か。「外国語は実用ではない、教養だ」と、ひとりよがりな教養趣味を振り廻した、小ざかしい声が聞えてくるような気がする。だが、国語たると外国語たるとを問わず、また実用であれ教養であれ、コミュニケーションの役にも立たないことばなぞおよそ三文の価値もありはしない。外国語の勉強とは、もともと得体の知れない精神修養のためにやるものではないし、またそんなものを他人に強制すべきものではないはずだ。

ところで、日本の外国語の実体がすでに述べてきたようなものであるとすれば、それではいったい学校では何をしているのかという素朴な疑問が出てくるのは当然であろう。いうまでもなく、こういった事態を招いたについては歴史的、社会的にさまざまな遠因があり、特定の個人や機関を槍玉にあげたところで何の解決にもなりはしないが、だからといって当事者である外国語教師が免責されるというわけのものではないと筆者は考えている。『閉ざされた言語』の著者は、「いったい、日本の学校で八年もかけて何百万人の若者に英語を教える目的は何かを改めて問い直す必要がある」として、「英語に限らず外国語を学ぶものの数を思い切って減ら」し、さらに大学の教養英語を「英文学者、英語学者の手から切り離す」よう提

案しているが、このわれわれ語学教師の地位を脅かすような提言は単なる思いつきなどでは決してなく、いずれも論証をふまえて強い説得力を持っている（筆者は、基本的には、その見解にすべて賛成である）。たとえばこのような提案に対して、それを突きくずすような、有力な反論がいったい外国語教師の側にあるのであろうか。

ともあれ、外国語の本質、そして日本におけるその現実——意味、目的——などが、少くとも関係者すべて（もちろん筆者を含めて）に正確に、十分に自覚されていたかは卒直に言って疑わしいと筆者は考えているが、正確な事実認識のないところに展望の開ける可能性もない。以下において、上に述べたような観点からの外国語について現状を検討し、ついでその問題について考えることにする。

1

日本人の外国語にたいするアプローチは、その言語観、外国観と密接な関連がある。したがって、今までのように外国語の学習、研究だけを切り離して、抽象的に「実用か教養か」などと議論したところでただナンセンスであり、不毛な水掛論を重ねるにすぎないであろう。

というのが、この問題に比較言語学的なアプローチを試みた鈴木教授が『閉ざされた言語』の中で、おそらくは始めて体系的に明かにしたことだと思うが、冒頭で触れた“日本の鎖国状態”についてももう少し考察を進めて見よう。すべての問題の根源はここにあるからである。

日本が東洋の辺境にある孤立した島国であり、日本の社会が日本語を話す日本人より成るというのはだれでも知っていることであるが、この一見何でもない事実が本当はそうではなく、同一言語同一民族というのが世界でも珍しい特殊な社会であり、それが日本人の言語観および外国観にどれほど影響しているかを教授は豊富なデータをあげて説明してゆくが、中でも日本人の白人コンプレックスをあげているのは基本的に重要な指摘だと思う。まだ日本人の大多数が、外人恐怖症を脱け切らず、「外人に対面す

ると心理的な安定がくずれ、心が動揺して、正常な思考が停止し、平衡のとれた行動ができなくなる」という心理的違和感のことだが、これはすくなくとも、ふつう、日本で育ったノーマルな日本人ならだれにでもおぼえがあろう。いや、ふつうの日本人だけではない。大学などで外国語や外国文化研究を専門とし、それを生活の糧としている人間の間でさえ、筆者の観察では、こういった恐怖症は必ずしも珍しいものではないようだ。

はじめに引用した新聞の文章『日本人の外国語』の提出した問題を受けて、別の論者が同紙上で感想を述べているが、その中でやはりこの日本人の外人コンプレックスに触れて、次のように指摘している。

問題はどうか「国際化」などといっても、日本人が外国人との間で劣等感か優越感か、どちらかでしか付きあえないところにあるようだ。
対等かつ個としての付き合いがまだできる段階にないのだ。その意味では明治から百余年をへても鎖国はまだ解けていないで、一億人が仲間うちだけで、「ナアナア」でやっているといった感じである。(傍点筆者)

(陸井三郎『外国人との付き合いと語学』)

「毎日新聞」昭和49年12月7日夕刊「学芸欄」掲載

それにしても、このように外人と対等の関係に立つのがこわく、そんな関係に入る気もなく、あるいはあっても避けて通るような人間が、同時に“臆病猫のチョッカイ”よろしく会話にあこがれたり、外国のことに異常な関心を示したりするとは、わが同胞ながら日本人というものが不可解きわまる精神構造を持った人種に思えてならないが、いずれにしろ、好むと好まざるにかかわらず——日本語がかかる同族会社にも似た、特殊な閉鎖社会のことばであることをまず確認する必要がある。

さて、このような閉鎖社会のことばとして日本語はいかなる特徴を持つのだろうか。

筆者は大学院の学生時代にフランス人の先生からフランス式論文(dissertation)の指導を受けたが、慣れない外国語で論文を綴るという難

業苦業にもかかわらず、この作業はきわめて有益であり、今なお——日本語の文章を書く時でさえ——その教えは生きている。その時に痛感したのは、日本の学校や社会でこのような思考の訓練をも兼ねた表現の訓練がないに等しいということであった。事実、小学校から大学の文学部にいたる学生生活を思い出して見ても、それらしい記憶がほとんど見当たらないのである。

それ以来、西洋人、とくにフランス人の言語にたいする姿勢が「方法的」あるいは「意識的」だとすれば、日本人のそれは「自然発生的」とでもいえるのではないかと思ってきたが、こんど鈴木教授が日本人のことばにたいする考え方を、西洋人のそれにくらべて「自然的言語観」と名づけ、社会的・文化的視野から論証づけているのを読んで、自分の考えが間違っていなかったのをうれしく思った。その細部は教授の本にゆずるとして、イザヤ・ベンダサン風にいうと「日本人は安全と水とコミュニケーションはタダで手に入ると思いこんでいる」ということにでもなろうか。

この地理的孤立から来る閉鎖性、人種のおよび言語的同質性、それにその言語自体の自然発生的性格などが日本人の外国語に対する基本的関係を規定し、他国にはないふしぎな感覚を生み出しているわけだが、それを具体的に見て行くことにしよう。

すでに述べたような特殊な国情にありながら、日本人は昔から外の世界に対して旺盛な関心を寄せてきたが、そのやり方も徹頭徹尾日本的であった。鈴木教授は、日本人が「国語」と「日本語」を区別するやり方から日本人の特異な言語態度に注目を向け、さらに「文化でも外のは貪欲に吸収するが、自分のものを積極的に広めようとしない。他者を理解しようと懸命の努力をするが、自分を理解させる手は打たない。日本にとって外国が理解すべき相手ならば、向うにとっても日本が理解すべき相手なのだ」という、同一レベルでの相互性の認識がまったく欠如している」と文化交流の完全な一方交通を指摘する。事実、日本は大量の外国語文献を年々輸入しているが、日本語の出版物はほとんどが日本国内消費向けで、完全な

輸入超過なのである。たしかに、国際交流というものが、相互間の理解と交流を前提とするのであれば、今まで国際交流などないも同然であったし、今なおそうである。

このような文化の完全な一方交通を「日本は受信装置だけは完ぺきだが、発信装置が故障している」と巧みに形容し、また、外国からの情報は強い引力で何でもとり入れるが、自らについての情報は外に発しないという点で、強い引力場のために外からの光を全部吸い込んだまま目に見えない暗黒になってしまった、宇宙のブラック・ホールになぞらえたのは梅棹忠夫教授だが、かかる観点から日本のヨーロッパ研究を見なおす時、それがいかに徹底して受身の姿勢に終始している特殊なものであるかにあらめて一驚を喫することだろう。そしてそれは、与えられた外国語の文献を絶対視し、一方的に日本語に置きかえることに精力を集中し、それだけに満足するという形で現われるが、このことが外国語の学習・研究についても、おそらくは他に類を見ない奇妙な観念を生み出していることも事実である。

およそことばには、活字のようにすでに与えられた、固定したものを讀んだり解釈したりという消極的な、いわばスタチックな側面と、会話・作文などに見られるように自己を表現し、表現を作り出して行くという積極的な、いわばダイナミックな側面があり、両方に通じてこそはじめてそのことばの理解に達したといえるのだが、日本ほど前者だけを絶対視し、後者を「実用」という不可解な名目で低級視・厄介視し、あるいは平気で切りすてて怪しまぬ国は世界でも珍らしいのではないか。「読書」という高級な(?)活動が、実際は、意味を読み取ってゆくという意味で会話・作文に劣らず実用的な行為であるのはしばしば指摘されるとおりだということは別としても、上のような論理を押しすすめて行けば、外国人の書いたものを一方的に読むことはノーマルなことだが、その相手のことばで意見を述べるのはアブノーマルな、低級なことだという、世にもキテレッツな議論に導くことになるろう。

『しやべる必要・不必要』という文章¹⁾で、人類学者の増田義郎教授が指摘するように、日本では外国語をベラベラ話す人間はとかく「インテリ」の間で軽薄としてきらわれ、むしろムツリ黙って横文字を読んでいるだけの人間の方が、何となく“エラく”、好ましく見えるという事情の反映であるとするれば、それまでである。それに何よりも、日本人の心に根深くひそんでいる“舶来もの崇拜”とそこから来る劣等感を無視できないだろう。だがいずれにしろ、このように相手のものを一方的に受け入れ、それについては仲間の間でこそ問題にすれ、直接その相手に意見をいうことなんか考えもしないし、ましてそのためのトレーニングなぞ夢にも思わないという、卑屈なまでの受動性、従順性が日本のヨーロッパ研究の特徴をなしているといつてよいが、この点、お隣の中国の姿勢はきわめて興味深いものがあるようだ。

最近中国を訪問した、文芸評論家でもある英文学の佐伯彰一教授によると、中国の英語のリーダーは、第一行が「毛主席万才」から始まって、ほとんどが中国に材料を取っているという。また、外国語教育は、そこでは、ほとんどの日本の外国語教科書に見られる、そして事実、それらを作る大学の教師たちの好きな教養趣味や、文学趣味を排除した、徹底的な実用主義に立ち、外国語は自分たちの思想をじかに外国人に伝えたり、説得するための道具であると考えている²⁾。この、日本とはいかにも対照的な外国語観を前にして、いまさらのように中国人の中華思想、自国の文化と歴史に対する強烈な自負心に驚嘆の念を抱かずにはいられないが、それはともかく、この例が日本の現状に比して——社会体制の相違を超えて——ある示唆を与えていることだけは間違いないと考える。

ところで、どうせ外国語を直接必要としない日本にあって、外国語はすくなくとも現状において、おおむね趣味ないし教養の域を出ないとしても、

1) 中公新書『私の外国語』、中央公論社。

2) 雑誌「朝日ジャーナル」特集・座談会『英語教育はこれでいいのか』。昭和50年9月19日号、84ページ。

外国を研究する学者までがすでに述べたように文化の一方的な流入に甘んじ、外国語で話すことに無関心であってよいかと増田教授は疑問を呈しているが、筆者も同感である。

外国文化を研究する日本の学者や教師の特徴の一つとして、「ぼくはしゃべれないので」とか「pratique はできないので」と、むしろ得意然としていう人が必ずしも珍しくないことがあげられると思うが、そういう場面に接して、筆者は、はじめから自閉児のように知的で積極的な交流や対話を拒否し、本という不完全な手段に頼り切り、その不完全な知識を基にして他国の文化について勝手な解釈にふけるという、そしてそれがべつにふしぎなこととも考えられていない日本のヨーロッパ研究の奇怪さ、グロテクスさに呆然とすることがある。

およそ物事というものは、消極的に与えられたものを受け入れているだけではなく、能動的に働きかけてこそはじめてその全貌を現すものだが、外国語の場合だけが例外であるはずがない。筆者はさきに、日本語とヨーロッパ語とがおよそ異質なことばであり、その習得がおたがいに異常な困難を伴うことを具体的に指摘したが、それほど異質なものであればあるほど真の理解のためには単に平面的でなく、立体的かつダイナミックな、積極的なアプローチが必要となってくるだろう。

さて、日本での外国文化の一方通行と、それが外国語の学習・研究に及ぼす影響について論じてきたが、最後にその日本語との関係について検討しなくてはならない。

日本では、外国語の勉強はもっぱら日本語で行われ、だれもそれをふしぎだと思わないが、これが国際的に見て異例に属するらしいことは、今年のフランス文学会の春季全国大会で行われた、昨年のフランス・スタージュ報告（尾崎和郎団長）からも明らかであろう。フランス人関係者が、日本ではフランス語の授業をすべて日本語でやっていると聞いてびっくりし、「そんなことをやっているのは世界中で日本だけだ」といったという。

この、外国語で表現されたものを一度必ず日本語に溶かしこんでしまう

という習慣が何を意味するか。日本の学校での伝統的な外国語の授業といえば、まず発音、ついで訳読というのが定石だが、筆者自身についていえば、いつごろからか、学生が発音を終えるが早いか、待ってましたとばかり、獲物にでも飛びかかるように、片っぱしから文章を日本語に置きかえて行くのに何か名状しがたい異様なものを感じようになった。といっても実際は「まあ待て」とか、「そんなにあわてるな」といって制止するのが関の山なのだが。外国語の勉強とは、書かれたものを一字一句抜かさないうで日本語に溶かしこむことだとも思っているらしい学生——ひいては日本人一般——の考え方に首をひねらざるを得なかったのである。

「朝日ジャーナル」のコラム（昭和49年6月7日号「文化ジャーナル・ことば」欄）は、アルゼンチンの日本研究家ドメニコ・ラガナ氏が新聞紙上にみずから日本語で書いて発表した文章にたいする日本人の反応を取り上げ、日本における外国語の特殊な受けとめ方に言及し、その外国語教育について、「このような教育の根本にあるのは、日本語の言語の総体と外国語のそれとの相違を無視し、日本語の言語体系そのものを絶対化し、日本語の言葉に見合うものが必ず外国語のうちにあるとなんの疑もなく信じこむ、日本語中心の逐語訳主義とても名づけられるものにほかなるまい」（傍点筆者）と指摘しているが、これはまさしくその間の事情を云い当てたことばであろう。冒頭に触れたように、せっかくの日本の英語および英語教育が、現代イギリス人の目に奇怪なものとして映るのも、まさしくそのためなのだ。「日本において、英語（どの言語でも）を学ぶ際、一番問題となることは、日本人は、外国語学習に多くの日本人自身の社会的価値観や、コミュニケーション・パターンを無理やりに課して来たということだ」（傍点筆者）。

このような、ごく無邪気でひとりよがりな、もともと無理なアプローチが破綻しないはずがない。さきのコラムは、続けて「日本語を外国語に訳してみたが外国人にはまったく理解されなかったということが、しばしば日本における外国語教育の欠陥として指摘されるが、そもそも日本語の発

想を下敷きにした外国語というものはあり得ないことなのである」(傍点筆者)という。日本人の作る英語について、たとえば東大の教授だか総長だかが外人の客を食卓に案内したのはよいが、日本語の「何ありませんが、どうぞ召し上ってください」というのを英語に直訳して、

There is nothing to eat. But please eat.

とやって、相手の客が目を白黒させたという笑い話のような話が伝えられているが、これに類する話は、挙げだしたら無数にある。それも今のように外国の文化をただ一方的に受け取り、そしてそれをもっぱら日本語を頼りに解説するという、きわめて消極的な、スタチックなあり方の当然の帰結なのである。ここで、さらに最近の外国語論争の提起者である平泉渉参議院議員の、この点に関する指摘³⁾に耳を傾けてみよう。

ともかく私を含めて、日本人の平均の英語学習者の、英語についておかししている「ミステーク」というものは、実は甚だ深刻なミステークが多い。つまり、むつかしい単語を使っているのに全く通じないとか、構造が根本的にまちがっているとかいうものが多い。病気でいうと「悪質」なのである。単語のまちがいとか、前置詞が不正確だとか各論に入る前に、そもそもヨーロッパの言葉らしくない——という種類のミステークである。(傍点筆者)

もともと与えられた外国の書物を受動的に読んでいるだけでは満足できず、外国語で表現するという事に関心を持ち、現実に教室でささやかながら作文を担当している立場から、日本人の外国語にひそかに溜息の出るような思いを味わい、そのことに気づいている日本人が必ずしも多くないことにいささかいら立つていた筆者にとって、これはまったくわが意を得た指摘であるが、ただ、議員が「ともかく私を含めて、日本人平均の英語学習者がおかししている」うんぬんとかとわっているのは謙遜というもので

3) 雑誌「諸君」昭和50年7月号・『明日の日本と外国語教育』、216ページ。

あろう。こういうことをいうと差しさわりがあるのを承知の上でいうと、教師自体——もちろん、かくいう筆者も含めて——の外国語が、大むねその域を出ていないのである。「日本人はしゃべるのは下手だが、本は読める」と漠然と考えられているが、このように見てくると、はたして本当に読めているかどうかさえ疑わしくなってくるではないか。

以上、日本独特の外国観と言語観を通して日本における外国語の問題をながめてきたが、結局は冒頭に紹介したこの問題に関する危惧を裏づけるだけに終わったようである。

日本人はごく簡単に「語学ができる」「できない」といつてき、今もいっているが、それがいったい何を意味するのか、ロクに考えたことがなかったのではないかと筆者はいま考えている。

2

以上に検討した、日本における外国語の現状は、すでに見たように日本のおかれた特殊な環境や、その国民性によって特徴づけられているわけだが、だからといってそれがもっぱら自然発生的に生れてきたと考えることはできないだろう。そこに見られる姿勢は、現実には、いうまでもなく学校や教育といった具体的な社会制度によって養われ、伝承されたものであるからだ。好むと好まざるにかかわらずヨーロッパ研究とヨーロッパ語教育が主力を大学の文学部に仰いでいる現状では、そこでの外国語のあり方にも目を向けるのでないこの考察も一面的という批判を免がれることができないだろう。

故渡辺一夫東大名誉教授は生前、毎日新聞紙上（昭和50年1月上旬より中旬）で『つれづれ草話』と題して、フランス文学よもやま話を記者との対談という形で連載しているが、フランス文学そのものだけではなく、日本の教育・研究に関する反省も聞かれる。いわゆる仏文科の人気について、教授は「日本にフランス文学なんてそうたくさんやる人が出たてしょうがない」といい、日本で仏文科の学生のほうが国文科の学生より数が多い

のは「変な話」であって、要するに、大むね「流行とか飾り」であるとも批判していて、一々もつともであるが、それに関連して教授のあげている「奇妙な学生」の例は、われわれの考察にとって見逃すことのできない問題を含んでいる。

仏文科を卒業してある会社の入社試験を受けた学生が、「あんたはフランス文学出身だからこのフランス文を訳してみなさい」といわれて訳せない。「仏文を出ているのになぜこれが訳せないか」とたずねたら、「私はフランス文学をやったんで、フランス語をやったわけではない」と答えたという。

こういった話を聞くと、今さらのように日本の外国文学科のあいまいな性格を痛感せずにはいられないが、それはともかくとして、問題は教授が「奇妙な」といった学生が、実は日本では——昔から——決して珍しいタイプではなく、べつに奇妙とも考えられていないこと、いや、卒直に言って、教師の間にさえ“理解者”や“同調者”がなくてはならないことである。

この現象は、——事の善悪はさておき——日本人には一種独特の文学の理解の仕方があって、それを勝手に外国文学にもあてはめて考えているところから来るように思われる。それは後に論ずることとして、この“奇妙な”学生の言動はわれわれ外国文化の専門の研究者にとっても決して人ごととは思えない、さまざまな問題を投げかけるのである。いったい、“文学をやる”とは——そもそも外国文学を——、また“語学をやる”とはどういうことなのか。ことば、すなわち表現問題を抜きにして、“文学をやる”ことがいつたい可能なのか。

筆者はそういった大問題に答えようとするわけでは毛頭ないが、ただこの——客観的に見て、たしかに奇妙な——学生のケースをきっかけとして、日本の外国語・文学研究の土壤に目を向けようとするのである。

—————。—————

永井荷風といえば、近代日本の代表的作家の一人であるのみならず、ヨーロッパ文化の紹介・研究の先駆者の一人としても忘れることのできない

存在といってよいだろうが、帰国後の作品『新帰朝者日記』に次のような一節がある。

語学の教師になろうか。いや、私は到底心に安んじて教鞭を把ること
は出来ない。フランス語ならば、フランス人の方が更によくフランス語
を知っている。

正宗白鳥は、その『作家論』の荷風論でこの部分を取り上げ「〔……〕と
云ってゐるなんかは生活に余裕のある人間にして初めて云ひ得ることで、
そんなことを考えてゐた日には、誰れだってこの辛い世に生きて行けない
のであるが、その言葉は真実である。私なども、さういふ消極的の責任感
は絶えず有って来たのである。生きるためには、知らざることも知った顔
して、今日となったのだが、世上を見てゐると、誰れだってさうなのだ。
「知らざるを知らずとせよ」といふ孔子の教へは固守しがたいのである。
私は、フランス文学でもイギリス文学でも、自信のある態度で教壇に立っ
て教へてゐる人々も、時々には心に疚しい思ひをしてゐるのではないかと疑
つてゐる」といかに白鳥らしい感想を洩らしている。

また、ドイツ語の碩学であつた関口存男は、近代日本の外国語学習、研
究史上に文字通り異彩を放っているが、この、ドイツにも行ったことがな
く、独学で大成した「一時代に数すくない天才」（手塚富雄）の外国語観
を聞いてみよう。

いかに楽々とドイツ語を物にしたかと思いきや、あにはからんや、この
大語学者は自分に寄せられる「語学の天才」なる形容を有難迷惑だといひ、
その語学がいかに意識的努力を重ねた結果の所産であるかを説き、「ある
種の細かいことになる、ちょっと恥しくて公開できません」と述べている
（『私はどういう風に独逸語をやってきたか』）。また一つの「語学を『本
当に』物にするのは大望です。語学そのものは小望だが、それを『本当
に』物にするのは大望です」（『新ドイツ語大講座・文法詳説篇・序言』）
といったことばも見られる。筆者は、物になるどころか、なかなかこちら

のいう通りになってくれないフランス語を前にしてこのことばをかみしめることが多いが、小説家と語学者のちがいはあっても、この二つの例はわれわれにあることを明瞭に語りかけてはいないだろうか。

それは、外国語とその意味が、そこでは全体として、掛値なしに捉えられていることである。いいかえればそこには、日本で外国語という**と必ず顔を出す**、あの卑俗な実用論や小ざかしいだけの教養論とはまったく無縁な、外国語の原点とでもいうべきものがしっかりと把握されているのである。

だが、こうした例は、日本ではむしろ例外であったといえるようだ。その証拠に、語学教師になるのに荷風のためらいを感じる人間なぞ、もうまったくといっていいほどどこにも見られないし、「語学は大使である」という考えもこれまた、まったくといっていいほど跡を絶ってしまったからである。それでは、そのかわりに登場したのは何であったか。

これから紹介する、以上の二人の例とはまったく対照的なエピソードがそのことを何よりも雄弁に物語っているようである。

フランス文学の故鈴木信太郎東大教授が、ある時、フランス語の授業を始めるに当たって文法の教科書を広げ、「ここには名詞のことが書いてある。ここには形容詞、このページには動詞……」といった調子で、文法をその一時間だけで(?)終えてしまったという。これは筆者がある時耳にした話であるが、同じようなことをだれかの筆で読んだ記憶もあり、この種のエピソードにつきものの尾ひれはあるにしろ、これに似た事実はたしかに存在したのであろう。

授業の合い間に教授室などでこのエピソードが披露されると、教師たちの間で笑い声が起こり、だれともなく「いや、語学なんてものはやる気さえあればだれでもできるんで……。それにしてもこのごろの学生はやる気がないから……」といい出し、「まったくそうですね」「本当にそうですよ」と相づちをうつ声があちこちで聞こえる、といった場面が見られるのではないだろうか。筆者の居合せた席でもまさしくその通りであった。

このエピソードとそれにたいする教師たちの反応は、日本の大学で外国文学や語学を専門に研究する学者たちの意識の、ある重要な一面をあざやかに照らし出しているように筆者には思われる。その意味するところはさまざまであろうが、当面の問題——外国語——に話を限ると、ある興味深い考え方がうかがえるのである。それはおおむね次のようになるう。

「外国語は、その気にさえなればだれにでもできる、すなわち、最低限の文法と、あとは字引きさえあれば何とかなる、いいかえれば、外国語なんてものはこちらで知的にコントロールできる、いわば思い通りになる道具のようなものなんだ」と。そういえば、日本で「語学がよくできる」というのも、実はその単なる道具を、一定の用語、云い回しさえ憶えてしまえば使えるという風に、手ぎわよく操つるといったどちらかといえばお手軽な技術と考えられてきたのではないか。だからこそ、自分は外国語の教師として糧を得る身でありながら、そのような“だれにでもできる賤業”に就いていることを認めるのをいさぎよしとせず、自分は語学教師なんかではなく、高尚な(!)文学や語学の研究者であると思ひ込む奇怪な人物を、ひいては故渡辺名誉教授が首をかしげるような「奇妙な」学生を生み出すにいたったのだ。

このように「生活であり、文化であり、歴史であ」(梅棹忠夫)り、「一国の文化構造、精神生活の源泉なのであり、幾百幾千年の洗練と深化を受けているため、化学などという底の浅い技術的な攻撃法では、僅かにその一端をうかがい知ることが出来るにすぎない、根が深く、はかりしれない存在」(鈴木孝夫)である[外]国語をごくお手軽な道具と考えて平気であったことが、何という途方もない無智であり、思い上りであり、オメデタさであったか、ただ呆れかえる他はないが、ここでは、このようなごく底の浅い考え方で外国語の教授が行われることが多かったという事実から目をそらせてはならないだろう。

その結果、日本人の外国語がいかに無残な状態におちいつているかはすでに指摘したのでここでは触れないが、この底の浅い外国語＝ただの道具

という、インスタント・ラーメン式の考え方が、あの、世界に類のない一大家庭教師産業——オーティス・ケリー教授は日本の英語教育を「邪魔している」ときめつけている——を生み出し、いわば、「一億総英語教師」といった天下の奇観を呈していることを付け加えておこう。

ところで、今まで見てきた日本における外国語の理解の仕方は、それが文学部を経由しているというところから、当然日本における文学の理解の仕方に相当の影響を受けていると考えなくてはならない。事実、この前に紹介した日本のヨーロッパ学に関する座談会で、出席者の一人、会田教授が指摘するように、歴史学専攻者に比して、文学研究者の方は、「文学青年がそのまま大人になったような」ところがあるのだ。さて、その「日本における文学の理解の仕方」の特徴とは何か。いうまでもなく、ここはその問題をテーマとして論じているわけではなく、またあまり大ざっぱな議論におちいることはつつしまねばならないが、近代文学が日本人にとって、とくに文学青年にとって宗教の役割を果たしていることを指摘したのは桑原武夫先生であった。

たしかに、日本で「文学をやる」という時、いかにも「俗事とは違うんだ」といった、一種秘教的な重々しさを持った特殊なひびきがあったことは否定できないだろう。そして宗教の役割を果たすとは、同時に絶対視ないしは神聖視されることを意味する。だが、それはまた特権ないしは独善につながる危険をはらんでもいる。「文学のためには何でも許されるのだ」という考えが、人生や社会にたいする無責任や甘えに転化することがまったくないとは断言できないのである。最近、北杜夫の新作をとりあげて、ある雑誌のコラムが「日本では、ともすれば文士・病が特権であるかのように思いこまれているふしはないか」（傍点筆者）といい、人間は文学がなくても生きるのに困らないのだと批判している¹⁾のもその辺の事情をいい当てたものであろう。

1) 「朝日ジャーナル」昭和50年8月8日号、「文化ジャーナル・文学」欄。

さて、すでに検討した日本人の外国語＝道具観は、おそらく「大切なのは内容で、形式なんかはどうでもいいのだ」という独特のメンタリティを勝手に外国語に投影したためではないかと思われるが、このようなことばに対する姿勢が支配する、上のような文学風土で、外国文学はどのように受け入れられるのか。日本の学生が、フランス語の初級文法などを終えたとすぐむつかしいものを読みたがり、すぐボードレールとかサルトルに飛びつくのがフランス人の目に——フランス人だけではないが——奇異なものとして映っているということはしばしば耳にするが、ここでは、かつてのラジオの「話の泉」で有名な渡辺紳一郎（元朝日新聞パリ支局長）の見た、日本におけるフランス文学を紹介しておこう。少し古い文章だが、日本的風土でどのように受け取られているかが的確に捉えられているからである。まず日本の「フランス語屋」を「英語屋」と比較し、「フランス屋」というのが、おおむね仏文学者であって、フランス語というものは文学だけのものであるという感を深からしめている」という書き出しで、次のように続けている。少し長いが引用しよう。

パリへ行ったって、往来の敷石がアンドレ・ジイドやシャン・コクトオで出来てる訳のものではない。下層階級の人間は別としても、中流以上の知識階級だって朝から晩までやれジイド、やれコクトオといってるものではない。文学といったって、パリの、またフランスの生活そのものを本にして出来てるものである、文学あって、しかる後に生活があるのではない。歴史、地理、人情、風俗を知って、それから文学を見ると、よく判るし、感じも出るのである。フランス文学はフランス人が自分のために書いてるのであって、他処の国へ輸出して外貨獲得するだけのために書いてるのではない。ちょいと文法をやって、いきなり高遠な文学書に飛び込むのは余り感心出来ない。日本の学校におけるフランス語学を見ると、教えるほうと、教えられるほうとの、相互の虚栄心から、基本語学、それから基礎知識も、ろくすっぽ出来ないうちに、フランス人

でも首をひねるような七面倒くさい書物に飛びついて行く。本当に読める筈はない。誤訳だらけの日本語で読んで、あっぱれフランス文学者になれるということがあるとすれば、我が日本は正に文字通り太平洋にある島の土人の国である。〔…〕（傍線筆者）

（“Table Ronde”，第三書房「フランス語教室」
昭和26年4月号，47ページ）

二十数年前に書かれた文章だが、冒頭に紹介した「奇妙な学生」がどうして日本で発生するのか、まるでその解説を読むようではないか。「教えるほうと教えられるほうとの、相互の虚栄心から」うんぬんとはまことに手きびしい指摘だが、たとえどれほどわずかでも、思い当るふしがあるかぎり、われわれとしてはその発言を虚心に受けとめる他はないと考える。

以上、日本人と外国語について注目すべき重要な指摘を掲げた『閉ざされた言語』にもあまり触れられていない——しかし、日本人の外国語および外国文化への態度を現実に形成していくプロセスとして基本的に重要な——側面を論じたが、そこに見られるのは、日本人独特の文学観とそのごく素朴でノンキなことばに対する考え方との結合であり、外国語および文学への、その一方的適用であった。

だが外国語に話を限れば、このようにして養われた語学力がたんなるコミュニケーションの立場からも、まして文学鑑賞および理解の上からも不十分で欠陥の多い、あいまいなものに墮することが多いのは自然の勢いといわなくてはならない。

大学では、以上の傾向がさらに、いわゆる教養主義の形を取っても現れるが、この点について、英語教育が概してとってきた教養主義をめぐってこの問題を「われわれ自身を含めて、大学英語教授者自体の体質、とくにその保守性の問題」としてとらえ、「英語学あるいは英米文学の専門家」であっても「かならずしも英語そのものの熟達者とは限らない」、大多数の大学英語教員が、さまざまな理由から、「とかく自分の好きな文学作品

などを選んで、その英文を学生とともに日本語に置きかえて能事終れりとする安易な訳読法を固定させて教養主義の牙城にたてこもる」(傍点筆者)として、英文学界内部での自己批判を展開している文章を参考までに紹介しておこう(『大学におけるLLの効用と英語教育』、『関西大学文学論集』第21巻第2号、昭和46年12月)。

『閉ざされた言語』の著者は、いわゆる語学について、「現在の大学教育体制の中で語学は、主として教養的な学問として文科系の教員の手にゆだねられている。しかし、私の見るところでは、外国語教育、殊に英語の問題は英語学の専門家や英文学者の手に負えないところまで来てしまっている。それなのに日本の英語教育が、依然としてこれらの人々の責任だと思われるところにあるところに大きな問題があるのである」(『日本の外国語教育について』)と述べ、外国語学習と文学研究を峻別し、テキストから文学を追放するよう提案しており、また筆者自身、さきに『英仏比較文体論』の紹介にあたって、外国語の勉強にさいしては、ふつうの市民の用いる日常語に重点をおくべきであり、文学などを必要以上に重視するのは愚かなことだと主張したことがあるが、こういった主張が決して根拠のないことではない——とくに、すでに見たように日本の精神風土では——のが以上の論述からは多少は明かになったものと考ええる。

おわりに

日本における外国語の問題をめぐり、当初に紹介した「日本は、横文字や反訳、西欧に関する情報が下痢症状を起こすほど氾濫しているという事実にも拘わらず、まだ鎖国状態を脱していない」という指摘から出発して、日本のおかれた状況に内在するファクターと社会制度としての教育を通して考察を進めてきたが、残念ながらその指摘の正しさを立証するだけの結果に終わったようである。

当然のことながら、日本人の外国語の理解の仕方は、その歴史的、社会的、文化的環境に大きく支配されていることがはっきりしたわけだが、そ

のことが——当の外国語関係者のレベルでさえ——十分には意識されず、そういった文脈を抜きにして、外国語をただ漠然と重要だと考えて抽象的に、たとえば「実用か教養か」といったごく無邪気な次元で受け取ってきたことが多くの混乱を招いてき、また招いていると筆者は今考えている。

だが問題の核心はもっと別のところにあるのではないだろうか。外国語にたいする姿勢は、いうまでもなく外国や外国文化にたいする姿勢に支えられているわけだが、日本人の場合はどうか。ある日航のスチュアデスは、新聞のインタビューにたいして「会社に入る前は外国、外国で、いろいろな面で日本より上等なのだろうと思っていました。でも、もう外国崇拜の気持ちは、ぜんぜん」と答え、今では日本史を勉強したいという。¹⁾ 大多数の一般の日本人のみならず、いわゆる“インテリ”にいたるまで、その外国にたいする態度は、この「会社に入る前」までのスチュアデスのその域を大して出ていなかったように思われるがどうであろうか。この点について、ある外交官は、日本人の外国に寄せる旺盛な関心の本質を、次のように鋭く指摘している。

日本人は自分の方から外国に近づくのは好きだし、勝手に外国の虚像を作って悦に入るのを得意とするが、外人の方が自分のうちに入ってくるとなると不快になってそっぽを向く傾向があるようだ。

長い鎖国の伝統が作りあげた理解の拒絶と孤高さは、すべてが国際化の荒波を受けないではいられない現代では、フランス人が時折示す自国文化の普遍性への鼻持ちならない自信過剰よりも、もっと手がつけられない代物ではあるまいか（傍点筆者）。

（明石康・国連大学創立委員会事務長、国連上級政務担当官。

『あれもこれも心配に——誘致成功後の「国連大学」——』

「毎日新聞」昭和48年11月10日夕刊「学芸欄」)

その関心の持ち方とは、実はこのように、もともと切実な主体的要求に

1) 「朝日新聞」昭和50年5月25日朝刊16面大阪版『若者』

根ざしたものではなく、ごくあやふやで中途半端な、ひとりよがりなものであったのだ。このような関心の持ち方に導かれた日本人の外国語が、同じ性格のものになるのはむしろ当然なのである。筆者はさきに、日本人が西欧の言語を習得する上で異常な困難に取り巻かれており、最悪の条件におかれていることを具体的に指摘したが、そのような悪条件に立ち向かうにはよほどの覚悟と努力、すなわち単なる好奇心、あやふやな教養趣味とはほど遠い、なみなみならぬ主体的な受けとめ方が個々に必要となってくるだろう。そしてその主体性が欠けるところに、ザルで水をすくうような今日の不毛性を招いた原因があるのだ。

ところで、「主体性」と口で唱えるのはごくやさしいことだが、具体的にはそれはいったどういうことなのか。ここで筆者は、たまたま読む機会のあった l'AUPELF (Association des Universités partiellement ou entièrement de langue française) の主催で、1973年夏、ブラジルのサンパウロで開催されたラテンアメリカ・フランス学科・センターの最初の地域セミナーとしてのシンポジウム《Amérique latine et cultures francophones》での報告²⁾を想起する。

その一般報告の中で、チリの Gerardo Alvarez 教授はラテンアメリカでのフランス語の現状を他の外国語とともに展望したあと、今日におけるフランス語教育の目的を問い正す。フランスから一万五千キロの距離にあり、圧倒的多数の青少年が、将来フランス語のテキストを参照することもしなければ、パリにおもむくこともないチリで、フランス語を教え、研究する目的はいったい何か、と。教授は、さらに、外国語の撰択やそれに関する決定が真空中で行われるわけではなく、必ずしも一般には意識されていない政治的、経済的等の要因に影響されるものであり、フランス語も決してその例外でないことを明らかにする。「フランス語はそのいわゆる美しさや明晰さのために、またフランス文明が他の文明より優秀であるために教えらるるのではない」(傍点筆者)。要するに過去の歴史的事情の帰結なの

2) le Français dans le Monde no. 102, janvier-février 1974, pages 6-17.

である。

ついで教授は現代の外国語教育が当面する問題に触れ、単なる外国語＝教養論に疑いの目を向けたあと、ラテンアメリカのフランス語教育の目的を、ラテンアメリカ諸国がその後進性を克服する斗いにさいして有効な道具となるところにありとする。このように古臭い教養趣味や文学趣味を排除して、フランス語とその教育をラテンアメリカの現実に適させるという考えが大会の出席者に支配的であった、と別の報告者は伝えている。

これを読んで、筆者は国こそ違え、同業者として胸をつかれる思いであったが、その際——日本とラテンアメリカとの国情の違いを超えて——わが国の現状について考えずにはいられなかった。

ある対談で、詩人の谷川俊太郎と作曲家の武満徹は、指揮者の小沢征爾と日本のオーケストラ（新日本フィル）との最近の国連での演奏に触れて、「あんなひどいものはない」と激しい失望を洩らしているが、谷川はその点について、「日本人っていうのはいままでずっとやらないよかやったほうがいいという発想があるね。つまり自分をクリエイティブにするために何かを拒絶するという発想は非常に少いよ」⁹⁾（傍点筆者）と述べている。これは日本の精神風土に関するまことし確な指摘だが、日本の外国語についても、まさしく同じことがいえると筆者は考える。すでに検討したように、外国語の原点とそれに対する主体的な立場というものがほとんど見失われている現在、もう一度、そこにさかのぼって考えなくてはならない。いったい、日本人にとって外国語は本当に必要なのか。もし必要だとすれば、だれが、どの外国語を、どの目的で、どのように必要としているのか。

そして、日本人の外国語の欠陥についてはすでに見たとおりだが、もう一度要約すると「外国語のダイナミックな現実から遊離した狭い技術主義」と「平面的でスタチックすぎる性格」ということになるが、これも「生活であり、文化であり、歴史である」〔外〕国語を単に小手先の技術ぐらい

3) 『武満徹音楽討論＝谷川俊太郎』。「音楽現代」昭和50年4月号123ページ。

に考えてきた、当然の報いであった。先に引用した、日本研究家ラガナ氏の日本語を論じたコラムは、続けて「氏の日本語上達の極意は、意外にも、実用を目ざした暗記や練習のうちにではなく、まず言語をささえる文化全体を可能なかぎり理解することをつうじて、その反映にほかならぬ言語の構造を的確に把握していくという、一見いかにも遠まわりの努力のうちにあったといえるであろう」（傍点筆者）といい、また英人ジャーナリスト・サープ氏も「私自身の場合も、日本語を習う際、日本の芸術、文化、それに社会背景をはっきり認識してはじめて日本語を学ぶ自信が出てきたのだ」と述べている。もし本当に外国語を学ぶのなら、これらの例からあらためて学び直す他に道はないといってよい。

外国語の問題は必然的に母国語と密接にかかわり合い、両者の間にあらたな緊張関係を生み出すのであって、その面も同時に論じなくてはならないのであるが、ここでは日本での過度の外国語熱が「一方では文化とかかわりなく外国語だけが重視され、他方では国語軽視の風潮が生れ、奇妙な外来語の氾濫と国語の乱れという事態を招来した」⁴⁾ という意見があり、筆者もそれにはまったく同感であることをしるすにとどめよう。

いずれにしろ、外国語の勉強は一大事業であり、故関口教授のいうようにそれを本当に物にすることは「大望」であることを今さらのように痛感して筆をおくことにする。

(本学助教授)

4) 「朝日ジャーナル」昭和45年10月11日号・「文化ジャーナル・ことば」欄、48ページ。

『閉ざされた言語・日本語の世界』、『第五章・日本の外国語教育について』。昭和50年、新潮選書、212ページ。

《シンポジウム》ことばの諸相と文化。季刊「創造の世界」15号、昭和49年、小学館、104ページ。